

芽生

宮本百合子

青空文庫

鴨

青々した草原と葦の生えた沼をしたって男鴨は思わず玉子色の足をつまだてて羽ばたきをした。幾度来てもキツト猫か犬に殺されるものときまった様な自分の女房は十日ほど前にまっくろな目ばかり光る魔の様な黒猫にのどをかみきられて一声も立てずに死んでしまった。たった一人ぼっちのやるせない体を楓の木の下にすえてこの頃メツキリ元気のなくなつた鴨は自分の昔の事を悲しいつらい気持で思いかえした。

「己は若かつた——ウン今思い出しても胸のおどる位元氣よく若かつた——そして羽根も自由に飛ぶ力をもつて居た！」

灰色のまぶたの下にどんよりした目をかくして尚思いつづけた。

「あの沼に居た頃は、マアどんなに嬉しい事ばかりだったか——己は、あのしおらしげな姿をして居た娘を、どれほど可愛がつて居たんだか——あの娘も己を思つて居て呉れたんだ。己達はいつも二人並んで歩いたり泳いだりして居たつけが人様よりも美しい毛色をもつた己はいつも仲間からうらやまれて居た。泳ぎ出しの姿がいいとほめたのもあの娘だ

つたし、好い事があるときつと自分をよんだのもあの娘だった。別れてからこんなに時が立つても己には忘られないほどあの娘は私の心に喜びを与えて呉れたんだった。けれ共——あの娘は今どこに居るか、生きて居るか、死んで居るかという事さえ分らないじゃあないか……」

男鴨は目をあいてかんしやくを起した様に身ぶるいをした。あたりを見るのもものうい様に自分が目をあけると、見たもの一つ一つから悲しさが湧いて来る様で又いかにも弱々しく力なげに目をつぶった。

「一番始めの女房は……よく覚えて居る。声の馬鹿に太い、足の目立って短っかい女だった。そうだ……一度目の女房の来た時に、私の羽根は切られたんだ。育てば切られ切られて満足な時のない様に人間と云うものがして呉れたんだ。己に若し呪う力があるならば、一番先に人間を——その次にはあの白くいやに光るするどい爪と齒をもった動物、あれを己は呪う、この暗いみじめな生活に私をつつき込んだのも人間と云うものの仕業だ。百姓のわなにかかつてから私のこのなやましい生活は始められた。己は人間と云うものを末の末まで己達の子孫の力をかりて呪ってやる。己の可なり愛して居た女房を三人まで殺したのはあの爪のするどい動物の仕業だ。己はあれも呪ってやる。己の敵は己の四方どこに

でも居るが……一人の味方さえ今の己はもって居ない——」

男鴨はもうどうしていいか分らないほどイライラした気持になった。大儀そうに体をうごかしてあてどもなく歩き廻った。そして何の気もなしに三人目の女房がひやつこくなつて居た茗荷畑の前に行つた。

「……………」

男鴨は息をつめて立ちどまつた。

頭の中にはあの時の様子がスルスルとひろがって行つた。女鴨が死んだと云う事は知つて居るけれども、そこに居る様に思われてならなかつた。つきとばされる様に男鴨は畑の中にとびこんだ。中には何のかげさえもない、女房の体の長くなつて居た所に自分も又体を横にした。

「これよりいやな思いをしない中に己は死ぬ事をねがって居る、……」

男鴨は斯うつぶやいて死の使の動物の来るのを待った。女房の血のにじんで居る土の上で自分も死ぬと云う事は死んだあとにも好きな事がありそうに幸福らしく思われた。

ジーツと男がもは待つて居た。けれども待つて居るものは来なかつた。

「己は死ぬ事さえ出来ないに見える」

うらむ様に云つて黒っぽい空を見あげた男がもは力も根もつきはてた様に羽番の間に首を入れた。「己は年をとつたと云つてもまだ若い方だ」と思つて十月に入ってから瑠璃色にかがやき出した、羽根の色を思つた。人間が春と秋とをよろこぶ様に自分達には嬉しい冬が来るのに、たつた一人ぽつと塀の中に、かこいの中に羽根をきられてこもつて居ると云う事は身を切られるよりも辛く思われた。

「このまんま飛び出してしまいたい」

男がもは稲妻の様に斯う思つた、「けれ共——羽根は切られて居る、すぐたべるものこまつて来る」と思うと自分の体を地面にぶつつけてこなこなにしていまいたいほどに思われた。

「アア、己は呪われて居る、——自分で自分の体をないものにする事はどうしても出来ない……それで居て己は殺してもらふ事さえ出来ない。ヘトヘトに世の中のことにつかれた時にギラギラと太陽の笑う下にみにくい死骸をさらさなくつちやあならないものに生れる前からきまつて居るんだらうか……」

鴨は白い目をして自分をむごくばかりとりあつかう天の神様と云うものを見きわめようと思つて空を見、木の間を見、穴の中をのぞいた、けれども神様と云うものらしく思われ

るものは一寸も見えなかった。

「神さまは天に居ると云う、又自分に宿つて居るとも云う、天にいらつしやるなら今見上げた時に見えそうなものだが——見えなかったと云う事はたしかだ。自分に宿つて□いるとしたらあんまりむごい事ばかりする神様だ——己は左う思いたくない、そうすると神様は死んでしまいなすつたものかナ、——神様——妙なものだ、考えても分らない、神さまなんてそんなに有難いものかナア、何にでも幸福を受けて下さるものとしたら己だけままつになつたのだが——」

はかなげな溜息をついた。そして茗荷畑からゴソゴソとおき出した。その茗荷畑のすぐ後に城壁の様に青く光つてそびえて居る人間の作つた壁と云うものをいかにも根性の悪いような絶えずおびやかされて居る様な気で見上げた。

なにげなくした羽ばたきの音は先が切られてあるんでポツリとした音であつた。その音を、不思議な様な様子をしてきた男がもしみじみと涙のにじみ出る氣持になつて又そのまんまそこに座つてしまった。

「ア——」

腹の底からしみ出す様に悲しい心は、口からとび出して斯ういう声になつた。

「アア、己は運命と云うものの前にひざまずいて思うままにされなくっちゃあならない体になつてしまった。己は、自分から運命を開拓して行く事は出来ない。ほんとうに己は呪われたあわれな一つの動物なんだ——」

あきらめきれないのを無理にあきらめて、男鴨はヨチヨチと立ち上った。同じ庭に養われて居る鶏までこの可哀そうなたった一人ぼっちの鴨をいじめるという事はなしにいじめ、いつもまつ正面からシゲシゲとかおをのぞき込んだあげくにくるりと後をむいてパツと砂をけあびせる様な事をして居た。

かわいいひよつこのする事さえ気弱なウジウジした男がもにはツンツンと体中にこたえた。

「どうしても、だれか殺して呉れるかひとりでに命のなくなるまではどうしても生きて居なくっちゃあならない」

と云う事は、女房をなくしてから、たださえ陰気なのが一層陰気になった男鴨にはたまらなく苦しい事だった。白い目をして天をにらんでは呪われた様な自分の弱い力を思つてイライラして居た。その次の日もその次の日も男鴨は一日も早く自分の生の終るのをまつた。死——斯ういう言葉がこの上なくたのしいなつかしいものに思われるまで「生」という

事にあきて来た。毎日毎日あの白い牙をもった動物の自分の生を絶ちに来て呉れるのをまつて茗荷畑に朝から日の落ちて小屋にしまわれるまで座つて居る。けれ共目ばかりが光つた動物は影さえも見せなかった。

今日も男鴨は茗荷畑に座つて居る。何にも来ない青く光る□を見あげては自分がまだ生きて居るという事をなさけなく思つて居る。ひとりでに命の絶える時が近づいた様に男がもの首はほそくなつて居る。

この頃

私はこの頃こんな事を思つてます。大した事ではもとよりなく何にも新しい事でもありませんが、この頃になつて私の心に起つた事というだけなんです。

私のまだほんとうの小つぽけな頃はマアどんなに自分が女だという事を情なく思つて居た事でしょう。本を一つよめば女だということがうらめしく思われるし、話一つきいたつて女というものに生れたのをどんなに情なく思つたでしょう。男でありたい、あの鉄で張りつめた様な強い胸をもつた……斯う思つて私は髪を切つちまおうとさえ思つたほどです

もの。

男でありたい——斯う思つてマアどれ位私は苦しいやな思いをしたか——

私は自分が女に生れたという不平さに訳もなく女というものをいやに思つて悪しざまに云つて、自分の女というのを忘れたいとして居ました。そういう時は随分長い間つづいて居ました。女がいやだと云つたつて年は立ちますもの。私の指の先には段々ふくらみが出来、うでの白さがまして行きました。そして私は今の年になつたんです。今の私の年になつてから急にまるであべこべに私は自分が女だった事を割合に感謝する様になりました。何故つて——私達とおない年頃の男の子を御らんなさい。妙にがさがさな声を出したりいやに光る眼をもつて居たり、あれを見ると私はむかつく様になつてしまいます。ほんとうに何ていやな見つともない事なんでしょう。それが女はどうでしょう。

皮膚はうるおいが出て来て、くびがきれいに見える様になりました。それで声だつてまるであべこべで丸アるいふくらみのある音に響くじゃありませんか。肩の柔かさ、指先の丸み——。女の美しくしさはますばかりですもの。

あれとこれ——あれとこれ——とくらべて私は自分の女だつて事を此頃はよろこんで居るんです。いろんな大きな事は男の方が幸福な事でしょうけど、一日中の暮し方でさえ出

来るだけ美しいものにしたいと思ってる私みたいなものは、たった一度でもあのみつともない時代をすごす事は考えるだけでも辛い事ですもの。私の手の形なんかは、いかにも女らしいふくらみをもつて育って行つて呉れます。そして私の声のおないどしの男の子よりも倍も倍も柔いということも知ってます。

縮緬のシットリした肌ざわり、しっとりとした着物の振りをそろえる時の心地、うすいしなやかな着物のあまつたれる様にかまる感じ、なりふりにあんまりかまわない私でさえこれは世の中の皆の男の人に一度はさせてあげたいと思うほどですもの——自分の心の輝きをそっくり色と模様に出した着物を着られますもの、その下には胸毛なんかの一寸もない胸としまつたうでとをもつてますもの。

そして又私は何のことにでもこまつかくオパアルの様にいろいろに輝いて見て呉れる心をもつてますもの。そいで男にまけないだけの事を出来ると思ってますもの。

私はこんな事を思つて肌のなめらかな女だつて云う事を喜ぶ様になりました。

何にも、今までにない事を見つけ出して自分の女だつて云う事をよろこぶでもなければ只肌の柔いからと云うだけでもないんです。

私は自分の肌の柔さ、色、きめ、そんなものから思いもよらない事を想像させられます。

私は自分の声に自分の声以外の何かがあるという事を思わされます。そんな事は男の人にも有るにきまっています。けれ共男が女の人を見て思うのよりも女が男の人を見て思うよりももっとこまっかい色とかおりをもつて居る事を私は知っています。

私は、自分の心の底の底までをさらけ出して居る様で、人に今まで一寸も気のつかれた事のない心をもっています。だから私は世の中の謎？ 悪く云えばはつきりしないろくでなしの心かも知れません。けれ共とにかく男よりはもっと細っかい心をもった女に生れたのを嬉しく思っています。

この頃の私はそう思っています。気まぐれな御天気やの私の心はまたどう変わるか分りやしません、まるであべこになつた自分の心を自分でも不思議の様に思われてこんな事も書いて見たんです。

浅草に行つて

その晩私は水色の様な麻の葉の銘仙に鶯茶の市松の羽織を着て匹田の赤い帯をしめて、髪はいつもの様に中央から二つに分けて耳んところでリボンをかけて居ました。紺色の力

シミヤの手袋をはめて、白い大きな皮のえり巻をして行っただけでした。

母とmとの間にはさまれて歩きました。

安っぽい絵襖紙を見る様なギラギラした感じのする下びた町すじを母の手にすがりついて物なれない人の様に特別な感じをうけながら――。行きずりのでれついた男達は私の顔をチラツと見ては意味のわからない事を早口に云ったり相手を私の方につきとぼしてよこしたりして行くのでした。その中にはまだ私と同年の位の小供から大人になる境の丁度小供の蛙みたいなどとのわかないみつともない形と声をもって居る男も交って居ました。そんな男を見るたんびに私は下等なきたない事ばかりを思い出して一々知らず知らずに眉をひそめて行きすぎたあと一間ばかりは早足に歩いて居ました。

「こんな所にたまにくると嗜味が低くなった様なうすっくらい様なところにひっぱりこまれる様な気持がしますネエ」

私はこんな事も云いました。

人と沢山沢山すれ違つて漸く私達は目的にして居たクオ・バデイスをして居る活動の前に立ちました。

私は家を出るときから斯うした冬の夜に歩くという事や、始めて活動専門のああいと

ころに入って見るといふ好奇心やその映写されるものをうれしがる心等がごつちごつちになつて訳のわからない氣持になつて居たんでしたのに、アア、私はもう一足も進みたくなほほど不愉快な氣持になつてしまいました。

入り口のすぐせつこい段々になつて居るつて云う事も案内女のいかにも浅草式な赤いかなきんの妙てこなものを着て白粉をコテコテぬつて歩くのにみにくい私がはずかしくなる様な曲線をつくつて居るのなんかは私の心を涙をこぼさせそうにしてしまいました。

それでも私達は目をつぶる様にして入りました。内はアノ玉乗なんかの様なきたならしい座布団をしいて座るところでした。三人はせまいところにキチンと座つて、半ばから来てよくつづきの分らないフィルムの動き方を見ました。私の囲りはみんな若いやすつぽいかおつづきの男達ばかりでした。

いきなり座つた私を間違つた事をしたあとの様な妙なかおをして見て居ました。

その中を私は女王の様なツンとした態度と氣持をもつて正面をジツと見たつきり囲りのものを私の下におしつけた様な、このフィルムを私一人のために動かさせて居ると云う様な氣持になつて居ました。

いろいろ道々して居た希望なんかは九分通りまでぶちこわされましたけど、たった一つ

最後の最も強い望は私の満足するだけ又それ以上なものになって私の前に展がって行つて呉れました。

白百合の様な姿とダイヤの様なかがやかしい貴い気持をもつたりジヤ姫、男獅子よりも強い忠僕のウリセス、ラクダの様な猿の様な狐の様な鼻まがりの悪党のチロポンピヤ、ビニチユース、ネロ、ペテロ、そうした人達の間を生れて来る大きな尊い芸術的な悲劇の中に私の心は段々とけこんでしまいました。

自我の享樂のためにローマの古いいくたの歴史の生れた市を火にしてその□に薪木からのぼる焰に巨大な頭をかがやかせ高樓の上に黄金の□□□の絃をかきならして大悲劇詩人の形をまねて焰の鬨の声とあわれな市民の叫喚の声とをききながら歌うネロの驕った紫の衣冠はどんなにかがやき、その心はうれしさにどんなにふるえただろう、私はそう思つてどうしていいか分らないほどの感じに足の先から頭の先まで波立って居ました。

この上なく、一寸さわるとはちきれそうになつた気持、純な感情のどれほど私の顔の上に表れて居るかつて云う事は自分でさえ知る事が出来ました。

「あんまり何なら見ない方がいいよ」

母はこんな事を云うほどでした。

ざつと四時間ほどの間私は一寸もゆるみのない気持で見ている事が出来ました。

一番おしまいのフィルムを巻き終った時もそこを出て道を歩いて居る時も私の心は芸術的なとのつた形になって今ここで一声うたい出したら死ぬまでつづけられそうな詩が出来そうな自分の心持の全体が一つものに結晶してしまった様なだれにもさわってもらいたくない気持になって居ました。

母とmさんは御土産の相談をして居ました。

母はかなり綺麗な女の居る店で、かわいらしいこんな時ににあわしいお菓子を買いしました。

「お父さまにネ」

こんな事を云つて居るのもいかにも柔くやさしく私の心にひびいて来て居ました。

うすつくらい悪い事の胞子がいっぱいど散って居る様なまがりつかどの、かどに居る露店のおばあさんのところに先有楽座の美音会の時にあった様なとんだりはねたりや、紙人形やなんか私のすきらしいものばかり並んで居るのを母は目ざとく見つけて呉れました。

私はその前に後にそる様ななりをして立ちどまって調和のいい色をした小さいの二つと

もつとやすい大きな兎と蛙とお獅子のをふくろに入れてもらいました。

それを二本の指でつまんで小供げな様子であの仲店の敷石の上を羽二重の裾を気軽らしくさばいて二人にかかるい調子で話をしながら歩いてかなり混んだ電車にのりました。一番はじつこにむずかしい顔をして額を押えて居た四十位の商人は私の大きくくった袂をぎこつちなくひっぱって自分のわきのすき間に腰をかけさせてくれました。私はその男のかおを一寸見てすぐ、

「私を私の年以上の女だと思つて居る」

こんな事を知つて悪がすこい笑いを心の中にかべました。そうしてそのせまつこいところ座つて窮屈な思いをしながらもまだすましたとりつくろつた顔をして白いうすい紙を通してとんだりはねたりの色や形を思つて居ました。

二つほど停留場を行つた時に一人間の悪そうなかおをしてのつた十九許りの制服を着て居ながら学生らしくない書生が私の前に一つあいて居たつり革にぶらさがりました。私は今まで少しゆるんだ心を又キューとはつて、前よりも一層つくろつた憎らしいほどすました様子をしました。

その男は油ぎつた何とも云われないや味な様子をして軽いカーブを廻る時、一寸止つ

た時、そんな時わざわざよろける様にしては私のひぎを小突まわすその意味が恐ろしいほど私に分りました。

私はその男の心をすっかりよみつくしてしまった様な顔色をして正面を見つめた眼をうごかしませんでした。そうして一寸さわったり小突いたりするたんびに、それよりもつよく目立つほど私は動をうごかしてその男の私のそばによれない様にして居ました。

こんな事のあるのも浅草だから——私はあきらめた様にこんな事を思つて居ました。

私が山下で降りるまでその男は私の前を動きませんでした。男の動かないと同じ様にそのどんづまりまで女王の様なツンとした態度をゆるませませんでした。

電車を降りて車にのつた時、私はその男に勝つた様にあの男の時々したうだうだな様子を思つてうす笑いをしました。

三年振りで行つて見た浅草の町の空気の中から私はいろんな今までとまるで違った感じを得たんです。

私のほしいと思つて居た浅草提灯はなく、三年前頃までのあすこの空気とまるで違った、前よりも一層なつかしみのない三年に一度位行く筈のところの様に思われて居ました。

銀座の町のすきな私は、浅草の町に行つたと云う事が恋人の外の男としたしくしたのを

女が悔いる様に私はよけい銀座の町にはげしいなつかしきをもつてゐる様になつたんです。

〔無題〕

外には木枯しがおどろくほどの勢で吹きまくつて居る。私は風を引きこんで出た少しの熱に頭中をかき廻される様に感じながら、わけもなく並んだ本の名前を順によんで行つて見たり読む気もなくつて一冊ずつ手にとつたりして居た。

ひがみ根性の様な耳なりはどんなにしてもまぎらせられないほどつきまとしてシーンシーンとなつて居た。

だれにあたり様もない私は、いまいましように壁をにらんだり綿細工の狸をはじきとばしたりした。

「いやんなつてしまう」

私はわきの筆立にみつともない形をして立つて居た面相をとつて齒の間でそのこじれてかたまつた穂をかんだ。恨んで居る様なゾリゾリと云う不愉快な音はあてつける様にほそい毛の間から起つた。

玩具のふくろうを間ぬけな目つきをしてポツポツと吹きならして見たり、とんだりはねたりもんどりうたして見たり、盛花の菊の弁をひっぱって見たりして、私はどれからも満足したふつくりした気分をうけとれないいまいましきに、いつものくせにピリツと眉をよせた。

若し私のわきに私より小さな妹だの弟だのが居たら、訳もなくっても大きなこえで叱ったりつきとばしたりしたかもしれないほどムラムラして居た。

「せめてM子でも来ればいいのに……」

この頃一寸もたよりをよさないM子や、あとあしで砂をける様にしてそむいたK子の事等が身ぶるいの出るほど腹立たしく思われた。

「M子のたよりをよこさないのや、来ないのは、私は快く許してやるけれ共、Kのそむいたのがどうしてゆるしてやるもんか……」

わけをも云わずに毎日会う毎ににげて居る様な様子をするK子がたまらなくにくらいしい。「あの人と私は、どうせ違ったものになつてしまふんだからかまうもんか……」

あの人は云いなり放だいに奥さんになつて子供をポカリポカリと生んで旦那に怒られ怒られて死んでしまふんだ。それよりは私の方がまだ考え深い生活をして行かれるに違いな

い。

マ、いいさ、どうせ人間同志のする事だ。たかがきまつて居る」

私はまけおしみの心でこんな事を考えた。

私は一度妙な様子をされた人にこつちから頭をさげて「どうぞネ」なんかと云つて又仲良くしてもらうんならかつて事はしたくない人間なんだから……

独りぼつちにされたつて、やっぱり何ともない様なかえつて愉快そうな笑いがおをして暮す人間なんだから、私は友達なんかなくつたつていいんだ、本さえあれば。友達に、しかも並々のより一寸仲よくした位の友達にそむかれたつて、泣きつつらをするほどのいくなしじゃあない。

私はまけ惜しみづよい自分を不思議に思いながら、やっぱりまけおしみづよくこんな事を考えた。

「どうせ——どうせ」

斯う思つて居るうちにちやつこい人を馬鹿にした様な涙が、ポロポロと意気地なくこぼれた。

「それでもやつぱり涙をこぼすワ」

私の一方の何でもをひやつこい目で見て居る心がささやいた。

「アア、アア」

K子の心のそこにまでふき込んでやりたいと云う様に深い溜息をついた。

目をつぶって手を組んで、私は出来るだけ頭をもちやげて——丁度我ままに育てられた放蕩息子が、母をくだらない事でビリビリさせて居る様に私の心を何かとつぴようしもない事をしでかすまいかしでかすまいかと案じさせるかんしゃくをおさえた。

目をつぶった前にK子の笑いながら私の心を掠め奪って行つた様子やHの丸い声や、M子の内気らしい肩つきなんかがうかんで来た。

フイと目をあいた時、おそろしい力でとうてい私のおさえる事の出来ない勢でかんしゃくの虫があばれ出した。私は歯をくいしばったまんま、ツイと手をのばしてわきにたて廻してあるはりませの屏風のうらをひつかいた。浅黄色の裏は、

「ソーレ」

と云つた様に白いはらわたをむき出した。

千世子のどうしようもないかんしゃくを、嘲笑う様にあさぎのかみはヘラヘラヘラとひるがえってペツタリとはりつくかと思うと、パカンと口をあいて千世子の心をいじめぬい

たあげくだらんと下つてそのまんま死んだ様に動かなくなつた。

私はそれを目をはなさず見て居た中にそのひるがえる毎にKのあのふくみごえの笑いごえが交つて居る様に思えた。

「HさんとMさんと母さん」

私はなげつける様にどなつて、ひやつこいたたみの上につつぷした。

こぼれ出る涙が畳の上に涙のうき島をつくつて、その女王に私をしてくれる様に思つてうす笑いながら私はなきつづけた。

雨の日

外はシトシトとけむる様な雨が降つて居る。私とお敬ちゃんは、紫檀の机によつかかつて二人ともおそろいの鳴海の浴衣に帯を貝の口にしめて居る。紺の着物の地から帯の桃色がういて居る。

「ほんとうにしずかだ事、去年もいつだったかこんな日があつたつけ、覚えてる？」

私はほんとうに好い気持で云つた。お敬ちゃんは畳に散つて居る五行本の字を見つめな

がら、

「ほんまにしずかな好い日や」

こんな事を細い声で云った。

「そやなあ、塗下駄はいて大川端を歩いて見たいなも、どんなにいいやろ」

私達はぶきつちよな口つきでこんな事を云いあつて顔を見合せて笑った。

お敬ちゃんの桃割れにかけたつまみ細工のしんから出るかるいおりにいい気持ちになりながら、

「紙びなさんつくつて見ない？」

「して見ましよう、もう私なんか十年も前の事だワ、そんな事をしたのは」

私は、千代紙と緋縮緬と糸と鋏と奉書を出しながら云った。器用な手つきをして紙を切つてさして居たかんざしの銀の足で、おけいちゃんはしわを作った。それに綿を入れてくくつて唐人まげの根元に緋縮緬をかけてはでな色の着物をきせて、帯をむすんでおひなさんは出来上った。二人はそれをまん中に置いて目も鼻も口さえない、それでも女と云う感じがする不思議なこの御人形さんを見て居た。

「たまにフツとした出来心でこんなものをこしらえるのも今日みたいな日には悪かない」

お敬ちゃんはこの事を云つて頭をなでて見たり、こまっかいひだをさすつたりして居る。

「紙人形は首人形と同じ位、私の大好きなお人形さんだ。あたまのこまっかいひだの間なんかにはキツトおばあさま、おかあさま、ばあやなんかの思い出がこもってる様でネエ」
こんな事も云つた。

「ネ、お敬ちゃん、お染とお七と——その氣持の出る様なのを作つて見ない」
私がものずきにこんな事を云い出した。

それから二人はまるではなればなれの氣持になつて、白い紙と糸と、幼い色をした千代紙で、自分の心にうつつて居るお染なりお七なりを表わそうとつとめて一つ鋏を入れるのにでも氣をつかつた。

「出来て？」

小さな声できくと、

「私、思う通りに出来ないんだもの」

おけいちゃんは斯う云つてフンワリ丸味のあるかおに高島田に結つて、紫の着物に赤い帯を猫じやらしにむすんだ人形をポンとひざの上になげ出した。

「もうやめましょう」

私達は一どにこう云つて、細くて長い雨足をシツクリ合つた気持で見て居た。

パタリとしとやかな音をたてて、お敬ちゃんのあたまから赤いつまみの櫛が落ちた。拾おうともしないでそつと見て居ると、すみの方の足に細い光る髪がキリキリと巻きついて居る。

古い錦絵、紙人形、赤いつまみの櫛の齒の黒髪、これだけの間に切つてもきれないつながりがある様に——又その間からしおらしい物語りが湧いて来はしまいかと思われた。

雨のささやきに酔つた様にお敬ちゃんは、机につつぶしてかすかな息を吐いて夢を見て居る。スーツとかるく出したたば、びん、耳から肩にかけての若々しいかみ。

私はどうしてまあ、今日はこんなにウツトリする様な事ばかりあるんだろうと思ひながら、長い袖でお敬ちゃんの首をかかえた。そして自分も夢を見て居る様に身うごきしないでジツとして居た。いつまでもいつまでもおけいちゃんは目をさまさなかつた。フツと身ぶるいをしてかおをあげたお敬ちゃんは、いきなり私のかおを見るなりつつぶしてしまつた。

「どうして？ うなされたの？」私はうす赤くなつたまぶたを見ながら云つた。

「イイエ、今までこんなに長い間、私はねてたんでしよう、随分何だ事……」

こんな事をひつかかる様な口調で云つて、肩をこきざみにふるわして笑つた。それから二人でわけもなく笑い合いながらお風呂場に行った。

「顔を洗うだけネ」

廊下でこんな事を云つたのに、あの何とも云われないお湯の香り、おだやかな鏡の光り、こんなものにさそわれてとうとう入ってしまった。湯上りのポーツとした着物をうすい着物につつんで、二人は鏡の前に座つた。

「これからどうしましょうネ、なんかこんな時にふさわしい事がして見たい」

私はうす赤な耳たぽをひっぱりながら云つた。

「そんならお化粧すりやあいワ」

雨の音にききほれてぼかんとした声で云つた。お敬ちゃんはすぐに言葉をついで、

「お化粧のしつこをしましょうネ、それがいいワ、ネエ」

こんな事を云つて、あまつたるい好い香りのするものや、ヒヤツとした肌ざわりの、それで居てたまらなく好い気持のものをぬられたりして變つて行く自分のかおを目をつぶつたまんま想像した。眉のあたりをソーツとなでて、

「これでいいんだワ、ごらんなさい」

私はこわいものを見る様に、両手でかおをおさえて五本の指の間から鏡の中をのぞいた。「マア」私はこう云わずには居られないほどきれいにあまったるい様なかおになって居る。「何故こんなになったんでしよう。あんまり私らしくない——まるで年中着物の心配で暮して仕舞う娘の様な——」

私が自分のかおを自分で批評して居るのを傍でおけいちゃんは目で笑って見て居る。

「こんどはお敬ちゃん番」

私はこう云って、このお敬ちゃんのかおを自分の思う通りに見ようと思った。お白粉もそんなにはつけず、一寸の間にお敬ちゃんのかおはまるで違って鏡にうつった。

二人は一つ鏡に並んで座って、笑い合つて見て居た。

「もうあつちにきましよう」

お敬ちゃんは前歯で帯どめをかみながら先に立った。小声で「己が姿を花と見てエ」つてあの歌をうたつて居る。

私はもう、何とも云われない、おだやかなブーツとなる様な気持で、こまっかいふし廻しの唄をきいて居る。

私の頭ん中には、もうよっぽど前つから思つて居た事が、今日現れたと云う様にこんな
にうれしいしずかな一日を暮される事が涙のにじむほどうれしかった。

「こんな好い日を送られるのも私達が若いからだ」

フツと思つて私は自分の肌からにおつて来るあまい香りを、いつまでもいつまでもしま
つておきたかった。

〔無題〕

何となく斯うポーツとする様なお天気なんで、血の気の多い女は身内からうずかれる様
な気持になつた。

ムツチリした指の先や白い足袋の爪先を見ながら、ひざの上にひろげてある『桜の園』
のまだ買いたての白い紙をチョイチョイ見た。

さあこの庭をなあ、借金の形にとられてしまうなんて云うのは……

あら御覧、死んだお母さまが庭に行くよ……

こんな字が意味もなくなつて頭にうつつて居る。

「アアアア」うんだ様なけつたるい声を出して、男の事を思いがけない時に好いものをひろった時の様な表情をして考え始めた。何にもない宙に二つ目が笑ってうかみ出た。ツウツウ——眉が引ける、鼻が出る、白い、気持よく力のこもったひたいがうかんで口が出来てそれからうす赤い線がこのまばたくまにならん小つぽけなものをかこんで、その線の上にあるお米つぶほどのほくろさえそえて——男のかおが出来上った。

そのうす笑いをしたかおを手の上ににぎって見たり、向うの方にほうりつけて見たり、髪の毛の間にたくし込んでしまったり、ややしばらく、いたずらつ子が猫をおもちやにする様に自分もうす笑いをしながらたのしんで居た。今まで少ししたるんで居た心は、急にキユーツとしまつて頬やこめかみのところにかかるいけいれんが起つて——いかにも神経質らしく女はその丸っこい手をふつてかたをゆすつた。

「斯うやつてポツカリと浮いた様な様子をして居られなくなっちゃった」

なげつける様に云つて、寝椅子からとび上つて湯殿にかけ込んで、水道の下にかおを出してザアザア目をつぶつて水をかけた。白いタオルでスーッとふいて四季の花をつけて、西洋白粉をはたいて、桜色の耳たぼとうるみのある眼を見つめた。女らしいやわらかさとかがやかしさを今見つけた様に、

「だから女がすきだつて云うんだ！」

と鏡の中の自分に云つた。一寸首をかしげてあまつたれる様な様子をして笑つて見た。白
いよくそろつた前歯は、まっかな唇の下に白い糸を引いた様に光つて出た。

ソーツと頬を両手で押えて見たり、眉をかくして見たり、唇をつまんで見たりして居る
うちに、たかぶりかけた感情は益々動いて、重つくるしい様なくすぐつたい様な氣になつ
て目の中に涙がにじみ出て来た。

「行つて来ようや、しようがりやしない！」

麻の葉の着物の衿をかき合わせて、羽織のひもを結びなおして髪をすいた。こんな事を
出がけにはどんな時でも忘れずにするつて云うのも女だからなんかと思ひながら、上り口
から低い赤と白の緒の並んですがつた白木の下駄をつっかけて出た。

うすつくらいほそい町を歩きながら、女は懷手をして小石をつまさきでけりながら、今
にもうたをうたい出しそうな、男の姿が見えたらすぐとびついて抱えそうなはずんだ氣持
になつて居た。

「夜という仮面をつけたりやあこそ、さもなくば氣恥しゆうて此の頬が紅の様に紅うなろ
う……」

自分が始めて云い出す事の様にふくみ声で云つて目をあげてうす笑をした。

男の家の丸アルいくもりがらすの電燈が見え始めた。この頃道ぶしんで歩きにくく、わざとする様にまかれた砂石の道を人の居ないのを幸に足の先の方で走つてくぐりをあけるとすぐうたをうたう様な声をあげて、

「居らつしやる？」

と声をかけてチューリップの模様の襖のかげから出て来る男の姿を描いた。

「お上り、随分思いがけない時……」

男の声が思いがけなくほんとうに思いがけなく二階から頭の真上におつこつて来た。妙にくねつた形をした石の上に下駄を並べて階子をかけた。

障子はすっかりあけはなされて、前の時にもつて来たバラがまだ咲いて居てうす青な光線が一つぱいにさして散らかった紙の上に男の影がよろけてうつつて居た。

「いそがしいの？ 今日来る筈じゃなかったけど例の気まぐれで——用事をしてらしたつてかまわない」

女はあんまり下らない言葉だと思ひながらこんな事を云つた。

「アア、そんなじゃないけどとにかくひまじゃないんだ」

男はたるんだ声で云ったのがふくれきつて居た女の心をひやつこくスーツとなぜて行つた。女は急に影のさした様な氣持になつて、机のはじめにチョンと腰をかけながら、濃い房々した男の髪を見ながら、

「あんた、今日どんな氣持でらつしやる？　ふやけた様に——たるんでるんでしよう？」
口元をゆるめないで女は云つた。

「又始まつた、だだっ子だなこの人は——」

男は何でもない様に云つて、ねりそこねたうどん粉の様な笑い方をした。

男のする事や云う事は、女の心に入つて行く時にはすきだらけの、みっともない下手なお化粧の様になつて、ほんのちよつぴりうしろにむきかけた女の心を段々とあと押しをした。

女がしまつた心で居るのに、男の方ではすきだらけで何でもないただの人をもてあつかつて居る時と何の変つたところもなく、「ほんとうにネ」「そうだ」「違ふよ」と云う言葉を繰返し繰返しかんしゃくがこみあげて来て、くしゃみが出そうになるまで男は繰返した。

「アア、私来なきやよかつた」

あきらめた様な口調に女が云った。

「マア、どうして？」

男はフイにどやされた様な声で云った。

「貴女があんまりのんべら坊としてる——すきだけで下手な話ばかりして——

一人ごとを云ってたつても、少しはしまった事が云える——」

「……………」

「もつと張りがある様にしようよ、そいで調子よくネ、考えなくっちゃあならない事、云わなくっちゃあならない事が山ほどあるんじゃないやありませんか……」

そう云って居るうちに、何とはなしに女はうつとりとする様なかい悲しさにおそわれて来た。

男はだまって廊下ごしに向うの森を見て居る、口の辺にはうす笑が満ちて居る。罪のな様なかおを横から女はしげしげと見入っていつの間にか自分までつりこまれてうす笑をした。

「いいあんばいだ。ようやくと少しは柔い気持になれる」

斯う女は思つて先にかがみの前でした様な様子を、器用に手早にさせて男の肩を両手で

ゆすぶった。

二人は崩れた様に笑った。

「何さつきあんなけんけんした声を出した？」

男は女の小指をひっぱりながら目を見て云った。

「何故って、かんしゃくが起っただけ——」

「馬鹿なこだよ、おこすわけもないじゃないか……」

「あんたが間の抜けた様子をするから悪いんだ！」

女はさっきの気持とまるであべこべのふっくりした声と気持で云った。

二人は窓ぎわに並んで座った。男の頭の回りをしとやかな秋の日和がうす赤にそめて居るのや、衿足のスーツと長いのが女にはやたらにうれしかった。

「私はうれしくなつて来た」

ことわる様に女は云つて、いつもする様に手だの耳ったぼだの肩だのをひっぱった。

男はしずかにしながら、小声で小学歌をうたつて居る。のんびりした音律のフレンチのしなやかな音調のうたは感じやすい女の心から涙をにじませるには十分すぎて居た。男の肩に頭をおつつけて目をつぶつて女は夢を見かけて居た。

「私達は人並じゃなくしましうよ」

女はフイとこんな事を云い出した。

「人並じゃなくとは？」

「ホラ、ネ、知ってるじゃありませんか。だれでもある様に死ぬまで一緒に居られる様な時になるとたるんで来て、お互にあきあきしてしまつてさ」

「私達にそんな事があるもんかネ」

「それをほんとうにネエ、なんて云うほど私の心はおぼこじやありやしない。だから私なんか死ぬまで別々の家に住んで、お互に暮し向の事なんか一寸も知りあわずに居た方がいいとも思ってる……」

「そいじや張合がないんじゃないか」

「だってしようがありやしない、いやな事にぶつかってしかめつつらをして又あともどりするより、笑いながら始めつからぶつからない様にして居た方が好いと思うから」

「もうおやめ、これがすめば又かんしゃくを起すんだろう？ おやめ、下らない、もつとおだやかな気持をいつでも持つてなくつちやあならないよ」

「だって考えられるんだからしかたがない、ネ、そうじゃない？ 『愛情の夫婦生活はそ

う長くつづくものではない、今さめたんだよ、これからは二人の間の忍耐力をためられる時が来たのだ、こらえろよ、ナ、こらえろよ』決闘ん中にあるじゃありませんか、斯う――

私はこんな事を思う様に、又人から云われる様にはどうしてもなりたくないんだもの……

「ほんとうにおやめ、今日はよっぽど亢奮して居るよ、もつとのんきな事を話し合ってたつていいんだから」

「エエ」

女は気のない返事をして、男は一寸もこんな事を考える事はないのかしらんと思った。男の手を後から廻して自分の手を持ちそえて頭を力いっぱいにしめつけた。そして神経的なまとまりのない高笑いをした。

もう男にすれきった女のような大胆な凝視を、男の瞳の中になげ込んで男の心の奥の奥までを見ぬきたい様な、片手でつかまえて片手でつきとばしてやりたい様な気持になった。

「一寸の間しずかに落ついて何にも考えずにおいで、又今夜ねむられなくなってしまうか

らサ」

男は不安心らしく小さい声で云つて肩を押してまどの日かげに座らせた。女は音なくされるままになつて、よろこんで居ながら反抗する氣持やフツと男のやたらにみつともないものに見える事のあるのを、ふしぎな情ない事の様にも又何となくすぐつたい事の様にも思った。頬杖について目を細くしてジーツとして居るのにあきた女は、鼻の方にあくびをもらして男の腋を一寸小突いた。クルリツと見向いた男の目の中に、女はいかにもかけ引きをして居る様な損得ずくらしい様な光りを見つけた様に思つて、

「何考えていらつしやる？」

いまいましそうな調子にとんがり声で男にきいた。

「何？ 人間は考えなければならぬ様に作られてるんだから何かしら考えてるサ！」

「何を考えろつて云う事は出来ない？」

「云つたつて云わないだつて同じ事じゃないか？」

「だつて——まさかお金の勘定もしやしまいしするけど……」

「お金の勘定するのがいやなんかい？」

「外の女よりはきらい、私が自分でお金をとる様になつたら部屋中机の中中^{ナカ}にまきちらし

て置いたらと思つてゐるほどだから……」

「勝手な事を云う人だよ、それで世の中が今渡れたら乞食は居るまいがネ——」

男は見下す様な気持で、口の先で云った。

「アア、今日はほんとうにすきだらけだったらありやしない、まるですきあなからお互にのぞき見して居る様だ、またいつかこんなならない様な日に来ましようネ……」

「そんな事云わずに世間ばなしでもしておいでネ、一人で居る時には考えてばかり居るんじゃないか——」

女はそれには答えずに、

「来る時には随分満ちた気持で居たんだけど、今じゃもうはぬけの様になっちゃったんだもの……」

やるせない様に云つて右の肩を一寸あげた。

「そんなに私をいじめるもんじゃないよ」

と低い声で云う男の口元を見た時、女の心の中には今までの後向になった気持にこつちを向かせるほど力のある一種のうるんだうれしさと悲しさがこみあげて、のどのところでホツカリとあつたかいまあるいかたまりになった。唇をかるくかんで女は男のかおを見入

った。大変おだやかなゆとりのあるかおに見えて居て、その両わきにある耳の大きさと鼻の高さが気になって気になって、どうにも斯うにもしようのないほどであった。目の前にあるかおをすぐに両手で抱えて、胸におしつけてしまいそうな氣持と何となくものぐさいようなものたりない様な氣持がのどの一つかたまりの中でもみ合つて女のかおは段々赤く目に涙がにじみ出して來た。

「たまらなくうれしくつてたまらなくいやで——もうたまりやしない——私は歸るサ、變になつちやつたから……」

ガサガサした声で自分から手をかたくにぎつて、女は云いながら立ち上つて、着物の上前をおはしよりのところで引っぱつた。

「じやおかえり、今夜は寝られなくなるかも知れないネエ、私もそこまで行こう」

近頃にならないほど感情の妙にたかぶつて居る女を、別にとめようともしないで男と一緒に上り口から輕るそうなソフトを一寸のつけて年の割に背のひくい男の白い爪先を見ながら、ふところ手をして歩いた。

二人はおうしにされた様におしだまつて、頭の方を先に出してあかるい町の灯をよける様にして写真屋のかどまで來た。

「ここで買物して私はかえるよ」

男は云いたくない事を無理に云う様な調子に云った。

「そう、家へいらつしやいな、あの人達もまつてるんだから……そうなさいネ」

女は別に並の女のよくする様なおあいそうのある様子や目つきは一寸もしないであたりまいサと云った様に云った。

「そうさネ……だが今日はようよ、用もたまつてるし書かなきゃならない事だつてあるんだし」

男は女に気がねする様にしずかに云うのをそっけなく、

「そう、じゃ左様なら、又いつか……」

と云い押えてかるく頭を下げて両手をふところに入れて、わき目もふらずに歩き出した女は、ふりつかえない。でも男が写真屋の店さきに原造の藥を出させながらまつひまに私の後姿を見て居るのだと云う事を知つて居た。あかるい町をすぎて、フイと暗い町すじに來た時、女はわけなく自分の傍を見た。そうして今ここに一人ぼっち歩いて居るのは、ほんとうの自分でない様に今までの事を自分でして來た事じゃない様に思った。

「妙なもんサ」

女の心はなげつけた様にこんな事をささやくと一緒に馬鹿にした様な涙がこぼれ出した。自分達の上で居る事の不平やら不安やらが頭の中におしよせて来た。眉をピリピリッとさせてうなる様に、

「どうせ……どうせ」

ときれぎれに云って立ちどまって深い息を吐いた。

「パンをかじりながらキッスをしなくっちゃあならない世の中なんさ」

女は暗の中にうごめいて居る見えない不安や不平にこう云いやって、手をおよぐ様にふっていきなりかけ出した。走りながら「どうせ……どうせ……」と女は思つてパツと見ひらいた目からとめどない涙をこぼした。

二階に居る時

ヘリのないぞんざいな畳には、首人形がいつぱいささつて夢口の紙治、切られ与三、弁天小僧のあの細い線の中にふるいつきたい様ななつかしい気分をもつて居る絵葉書は大切そうに並んで居る。京の舞子の紅の振、玉虫色の紅の思われる写真は白粉の香のただよい

そうに一つぱいちらばって壁に豊まるの女、豊国の女房はそのなめらかな線を思いきりあらわしていっぱいはつてある。すすけた天井からは、浅草提灯が二つ、新橋何とかとそめぬいた水色の手拭までさげてぶらさがって二つある。柱には紙で作ったひなが二つ、昔話しを思い出させる様に、はすつかいにとめてある。唐紙、カンバス、絵の具、なつかしい切り抜きの絵、文芸雑誌——そんなものがいっぱい散らかって漸く私達の座る事の出来る所だけすきのある様なせまい二階に二人は熱にうかされた様に話し合つて居る。だらしないとりとめのないような部屋の中にもどことなしに私の心にピッタリとあう、なつかしきとおいがただよつて居る、髪を一寸ながくして内気なかおにかるい笑と力づよさをうかべて一生懸命に話す若い絵書きの前に、私は髪を一束につかねて、じみな色のネルを着てその人の絵絹の上に細筆を走らせる時の様に、かすかに動いて居る様な手を見ながらその話にききほれて居る。

「話し相手がないもんですからネ」こんな事を云つてその人は思つてゐる事——今まで話する人がなくなつてためて置いた事をあらいいざらい云つてしまわなくっちゃあならない様に話して居る。

「いやんなつちまうんです、ほんとうに、老よりばかりですもん、どうでも私の思つて

る事なんか分るもんですか。それで居て勝手な事ばかり云って居るんだもの……私達が又今の親達位の年頃になれば子供にこんな事云われる様になるんだろうけれ共——」

「誰だつてそんな事思うでしょう……我ままじやなくしたつてそうにきまつてるんですもの……それで又、親なんかなるとまるで自分の若い時は人間じやなかった様に若々しかった気持、たえず震えて居た心なんかつて事はまるで思いきったほど忘れてるんだから……」

「そうですよ、ほんとうに、エエほんとうにそうなんです。忘れるも忘れるもいじの悪いほどきれいに忘れて生れ落ちるとすぐつから世間を知つて居た見たいにサ、私達にはしゃべつてるんだから妙なもんですよ、頭なんて云うものは」

「まるで忘れてるつて云うんでなくつたつて、新しいゴムマアリの様に力強い若々しい嬉しい事、悲しい事のしみじみと思われた時代を気のぬけた風せんの様にクチャクチャになつてしまった今日思い出すのはキット辛い事です。だからわざと思ひ出すまい思ひ出すまいとしてるんでしょう。私はそんな風に思われます……それがあつてましようキツト……」

「私達みたいに若いもんでさえ、落椿を糸で通してよろこんで居た事を思い出すと寒い様

な気になりますもんねエ」

「……」私はフットさしてある首人形を見てお妙ちゃんを思い出してしまった。うつむいてかくく目をつぶって「忘れたい」と思ってた。あの時着て居た着物——あの時さして居たカンザシ——帯、はこせこ、こんな事がズラリと頭の中にならんでしまった。

「どうしたんです？」その人は私が急にだまりこんで考えてるんでビックリした様なつづぬけの声を出した。「何でもないんです。一寸首人形を見たら思い出した事があつたんです……」こんな事を云って私はつくり笑をした。

「どんな事？ 首人形を見て思い出すなんかって……いかにもやさしそうな事ですネ、話しませんか？」

「エエ、そりやあやさしい事^{こと}ってすけど……こんなところでポイポイ云ちまうにはおいしい話だから私がお話ししたくなつた日に云いましょう」

「大抵は想像してるけど……京の舞子かなんかの話しでしょう、そいでなくつてもキット京都にかかりあいがあるに違いないネ？ そうでしょう？」

「それだけ分つたらもうだまってらっしゃい、それより余計な事をおっしゃるとキット私のいやな事になるから……」

「何だかおどす様な事云うんですネエ」その人は私のかおを見ながら、こんな事を云った。私は首人形を見つめながらだまって笑って居る。

「あの私がよく行く京橋の家に三階から『テツテケテ』なんかつてうたいながら、二階の私の居る部屋にいつでも降りて来る女が居るんですよ、二十位でネ、いい様子じゃあないけれ共、自分をいい様子に見たがつて一寸椅子に腰かけるにもまっすぐにはかけない人なんです。考えはなくても口ではいろんな事をしゃべりますよ」

「ヘエ、それでも一つ位いいところはありましよう、女ですもの……」

「まつげが思いきって長いんです、目つきは悪いけど……」

「私はまつげの長い人が大好きなんです、だからだからその人も好きになるかも知れませんが、会って見たら……男の人でもまつげの長い人は好きですもの……」

「エエそうですよ、まつげの長い人は下目をした時にきれいなもんです……」

「この頃、貴方の書きたいと思う様な人がありまして？」

「ありましたとも、大ありだったんですけど……ほんとうに思い出しても腹が立つちやあうんですよ」

「逃げられたんでしょう」

「にげ様にもよるじやありませんか、マア、斯うなんですよ、私がネ、こないだ新橋に行った時、ステーションにですよ、その時あの玄関に二人女が立ってたんです。十七八年頃で、同じ位の年でネ、どっちもきれいなんです。一人は、洗髪にうつすり御化粧をして、しぼりの着物に白い帯をしめて……も一人は大模様の浴衣がけで同じ帯をしめてたんですが、着物の色の顔にうつりのよかった事したら、たまらないほどだったんで、とうとう我まんできずにその女のとこに行つて、『書かして呉れませんか』つてたのんだんです、そうするとマア、思いがけなく『エエ、ようござんすとも、こんなおたふくで御氣に入りやあ』つて云つたもんで家から、場所から——御丁寧に道順まできいたんです。新橋のネ、橋の一寸わきの芸者なんですよ、マア、その晩私がうれしかった事、一晩中ねられやしませんでしたよ、ほんとうに……」

「マア、それまででにげられるんなかって……抱え主が苦情でも入れたんでしょう？」
「そうなんです、それから翌日、ホラ、あの二百十日前に荒れた事がありましたつけネエ、あの日に絹から筆から硯まで抱えて、新橋くんだりまで絹をぬらすまいぬらすまいとして出かけてその家に行ったら……始めは居ますつて云つて、あとから居ないつて云うんですよ、いつかえるつたつてあいまいの事ばかり云つてちがあかないんです。だからキ

ツト抱主が苦情があると思うからそれつきり行かないんですけど……あんな情ない腹の立つた事はありませんよ、ほんとうに、あんなものは二言目には金なんだから……」

「……」私は一寸何と云つていいか分らなかった。あたり前にお気の毒さまなんかつて云うのがいやだったんでだまつて居ると、「貴方モデルになつて呉れませんか」こんな事を云い出した。

「なつたつてようござんすワ、だけど私が私の勝手でした風が貴方の氣に入つたんならお書きなさりやあいいわ、毎日でも……わざわざ私の氣から出たんでもなくつて、貴方の心のまんまの形を作るのはいや……」

「何故？」

「何故つて……あれじゃありませんか、貴方が今私に本を見ていらつしやいつて云つたからつてその風をしたつて、私の心の中にそんな氣分がなければ、形と氣分とはなれたものになつちやあうじやありませんか。だから私が心ん中から思つてした様子はいくたびしたつてまるで氣持と形のはなれきつたものにはなりませんもの……」

「そいじやああんた中々そう私の思う通りの風はしないでしよう？」

「そりやあそうかもしれませんワ、私はどうしても心にならない様子や事を云うのは大つきら

いなんだからしやうがりやしません」

私達はてんでんに別な方を見て斯んな事を云つて居た。

「私ね、幾年も幾年も一つ家に暮して居たくないんですよ、毎日毎日どつか違つたところにすまつて、まるで違つたものを食つて居たいんだが……」

「そうなさいな、いくらだつて出来るじやありませんか、女と違つて男ですもの、そんな事は勝手じやありませんか」

「でもやつぱりひとりじやあないからそうも出来ないですよ……」

「そんなら部屋の様子でも一日ごとにかえてたら少しはましでしょう」

「自分でするのが面倒だから……」

「そんなら面倒くさいからこうすりやあ一番ようござんすワ、貴方のもつてるもの、筆でも絵の具でも紙でも絹でも皆んなこの部屋の中にぶちまけちゃつて、そんなのにもぐり込んで居れば手にあたるものがみんな違つていいでしょう」

「そうですネー、今もよつぽどそれに近くなつてゐるから……そう云えばまるで違う話だけどこないだ一寸女んなつたんですよ、学校の着物をかりてネ、紫の大振袖に緋の長襦袢を着て厚板の帯をお太鼓にしつて雨の降る日でした。マントを着て裾をはしよつて頭はこの

まんまで先生のうちに出かけたんです。門のところにマントをかけて置いて、蛇の目を深くさして白足袋をはいて『御免下さいませ』ってやったところが、先生の奥さんが出て来て『いらつしやいまし、どなたさまで』っておじぎをなすつたんで傘をもったまんまポツカリ頭を下げると、先生が出て来られて『マア上り給え』と云って半分笑われ半分叱られて来ましたつけが……面白いもんですネー、又して見ようと思つてます」

美術学校の人のよくする事だと思つて私は笑いながらきいて居た。心の中でそうつと私も男にいつかばけて見ようと思つて居た。ヒョイと見ると歌まろの絵のわきに細筆で書いてたらしい様子に「あの女」と書いてある。私はそれをジーツと見つめて居ると「貴方、あの女つてのを見つけたんでしよう」つてその人が云う。「エー」私はそつちを向いたまんま返事をする。

「先にここに同じ級の書生が二人居た時に一人の男がフツとすれ違ったそんなにいい女でもないのがどうしても忘れないつてしよつ中教えてたんでも一人が何だかここに歌みたいなひやかしを書いたのがまだ残つて居たんです」こんな事を云つて呉れた。ポツンと話のとぎれた私達はあの女と云う字をジーツと見つめて居たが、いつだったか長唄をならつてゐるつてきいたんでそれを思い出して、

「貴方三味線きかせて下さいナ、下に居るあのまっくらな猫もつれて来て……」と云った。「いつきいたんです……エエひいてもようござんす。手かも少し白いといいんですが……」こんな事を云つてまっくらい猫と三味線を抱えて来た。まるで女の様な手の曲線を作つて本調子で何だかこう、あまつたれた様なやんわりした気持になるものを爪弾して居るそのうしろには豊国の絵の女がほほ笑んで、まっくらに光る毛なみとまっさおな目をもつた猫は放つた絵絹の上になて居る——何となしに私の心持にピッタリあつたものがある様でその器用にうごく手を見ながらほほ笑んだ。

その人は小声になんかうたつて居る。かえつて文句のわからない方が私にはうれしい。まるで傍に人の居るのを忘れた様に自分の爪の先からかき出す音の行末を追う様に耳をかたむけて居る。私はそのしのび泣いて居る女の様な何とも云われないやさしみとつややかさをふくんでないて居る爪弾の音にいつも私になる様に目の内があつくなくて来た。私はかくく目をつぶりながら「あの黒い髪をちよんまげに結わせて——よろけじまのお召の着物を着せてその青白い細面てのかおにうつりいい手をして居たら……」こんな事を思つた。斯うしたおだやかなうつとりした様な気持のさめないうちに、今の気持をソツとかかえて家に帰ろう、つづけて斯う思つた。

そして自分を忘れて細い糸からもれて来る音にたましいをうばわれて居るその人のまっくろな眉を見つめた。

まどから見おろす庭の萩シヨツキがうちきらしくうなだれてこまっかい檜の葉一枚一枚のふちが秋の日に黄金色にかがやいて居る。しずかだ。

二つの心

二つの人間はピッタリと並んで歩いて居る。その後には長く引いて居る影もその間にすきのないほどくつついて居る。

女同志でおない年でおついの着物で――

顔と髪 of 長さの違うばかりである。

二人は御墓の間を歩いて居る。

かたっ方の心は、

「何と云う御線香のにおいはいいんだろう、そして又この静かきといったら、こうやって歩くのにほんとうにふさわしい」斯う思つて居る。「おおいやらしい、こんな所は早く通

りすぎちやわなくっては、あの沢山の墓の並んで居る様子といったら」

も一つ心は斯う思つてゐるという事をだまつたまんまでも一つの心が見ぬいて居る。

二つの心のまるではなればなれな事を考えて居ながら、それで居ていかにも仲よさそうにして歩いて居る。こうした気持をもつて居る一人は私、も一人はおけいちゃんである。

「私もうこんなとこいやだ、どつかもつとにぎやかなとこへ行かなくっちゃあ」

おけいちゃんはそんな事を云い出した。

「ちつともそんな事はあるやあしない」

私はお敬ちゃんの手をにぎつて、細い道を縫つて歩いて居る。二人の下駄の音の外には何にもきこえない、一言も口をきかずに手を夢中でにぎりあつたまんま、まるで気の狂つた様に歩いて行く。

「そんなにいじめずにサ、ネ、別んとこへ行きましょう。私もう我まんが出来ないんだもの」

立ちどまつておけいちゃんはおべこべの方に私の手をひっぱりはじめた。私も一緒にたちどまつておどおどした様な子供供した御敬ちゃんのかおを見つめる。思わずうす笑いが口のはたに浮ぶ。

「ほんとうになんだか気味が悪い人だこと、それに今日はいつもにもまして変な様子をしてくる」

私の見つめて居るのをさける様にわきを見ながら云って居る、フツと私の心の中で「今日は私の一番仲の好いこの人をいじめて見よう」こんなむほん気が起った。

「私ここが大好きなんだから、こんないいところってありやしない」

「何故？ 私こわくってしょうがない」

「何故って分らないの、お墓は人間が限らない長い間、棲んで居なくっちゃならないんじゃないの、人間が空気を吸ったり吐いたりして居た時よりも倍も倍も長い間ネ」

「貴方は墓すきなネ、キツト、だからこんなに私をいじめてよろこんでるんだ」

「好きだワ、そりゃあ、しゃべって働いて食べて居た時よりも石になるとその倍も倍もの意味があるから……」

「私そんなことはどうでもいいから、早くよそに行きましょうよサー」

「いや、日が暮れてもここに居るワ、私の帰りたくなるまで……だけど私、貴方がすきなんだからいい」

私達はいつの間にか歩き出してこんな事を云いあつて居る。お敬ちゃんはたまらなくこ

わそうに、私の手につかまって、下駄をひきずって歩いて居る。

「私達はもうじきに別れ別れになる時が来るんだ、キット、今日はその前兆に違いない様に思われる」

お敬ちゃんは今をとった様な声で云った。

「エエ、別れ別れで居たものがこうやって一緒になったんだから又別れ別れになる事はあ
るかも知れないがまだなかなか私の死ぬその時までは大丈夫だと思ってる。私お敬ちゃん
がすきなんだから……エエ、そりゃあ大好きなんだから……」

こんな事を云う間お敬ちゃんは淋しい目つきをして私を見て居た。

私は私を真面目に見てて呉れる人をこんないたずらをしちやあすまない、斯う思われて
来た。かまわない今日一日は自分で自分の心がどうにもならないほどにいじめぬいてやる。
私は自分の気持をジーツと見つめながら斯う云った。一寸たちどまって又歩き出した。

二人は手をしっかりとにぎりあつて居る。その指先にはお互のかすかなふるえがつたわつ
て居る。早足にトットツと歩いた。

お敬ちゃんはどうなっても仕方がないと思い、私は只あるいてさえ居ればいい、斯
う思つて居る。いくつもいくつもの細い道を曲つた。そのたんび二人はもと来た道をふり

返りふり返りして居た。

私の心ん中は妙にかちほこった様なこんじよの悪い力づよさがこもって居る。

お敬ちゃんとは私のためならどんな事でも、と云う様なすなおな「マア」と声を出したい様な様子をして居て呉れる。そんな様子を見た私は段々むなししい気もちになって来た。けれども「何！ 何！ 今日一日私の心をいじめてやるんじゃあないか」斯う思つて奥歯と奥歯をしつかりとかみ合せた。そうして又歩きつづけた。

一足毎に私の苦しさは段々と勝つて来た。私は「何！ 何！」斯う云いながら太い太い溜息をついてヒョット御けいちゃんのかおを見た。

「アツ」私はそう云つたまんま目をつぶらないわけには行かなかつた。ガツクリとあごのはずれた骨ばかりの顔がお敬ちゃんの胸にくつついて居た。どうしても私はそれが気のかげんだと云つてしまえないほどおびやかされた氣持になった。そしてふるえた。いかにもおく病らしい声で斯う云つた。

「今おけいちゃんのかおが骨ばつかりに見えた」

「何をマア、だから貴方今日はどうかしてゐるって云うんだ、その青いひやつこそんな顔はマア」

思いがけなく今まで思いもよらなかった力づよい様子をして私の肩を叩いて居る。

私とお敬ちゃんの気持はまるであべこべになって仕舞った。そして、苦しさにみちた私の心は、いまにもはりさけそうになって居る。ひたいがづめたくなって、気が遠くなりそうな気がする。

「そんなに苦しいんならもうゆるしてやるがいいさ」形のないものは私の頭に斯う指図をした。

「家へ帰りましょう、それから思いっきりにぎやかな所へ行きましょう」

小さい声で云ってつまさきを見たまんま大急ぎで家の沢山ある通りに出た。

そして、そのシトシトと秋の空気の中にひびいて居る人の足音、潮の様などよめき、そうしたものの中に私達二人はホツとしたように手をかたく握り合って立った。急に私の目から涙がこぼれて来た。それをかくそうともしないで私はお敬ちゃんの手をひっぱって、嵐の様な勢で家にたどりついた。そして私の部屋に二人で馳け込むやいなや、私はたまたまなくなっておけいちゃんのひざにつつぷして仕舞った。

御敬ちゃんは、

「貴方、あんまり何か考えすぎたんだ、キット、けどもうすんで仕舞った事だから……」

こんな事を云つて私の頭を押えて居て呉れた。私が泣きやんでしまつても、二人は手にぎりあつたまんま、口もきかずにお互の胸の波うちを見つめて居た。

彼の女

日向ですかし見るオパアルの様な複雑した輝きと色とをもつて居る彼の女は、他人の量り知る事の出来ない程いろんな事を考え、想像する力をもつて居た。彼の女は、毎日の暮し方でも気質でも進んで行く方向でも、まるであべこべの事をして居る男でかなり仲の好いのをもつて居た。女の心から出るいろんな光りは、男の様子をこの上なくきれいなものにして見せたり、又とないほど腹のたつほどいやなみつともないものにして見せた。笑いながら軽い口調でじょうだんを云いながら、女は男の心を目の前に並べて見て居ると云う事は、男がどんなにしても知る事の出来ない事だった。女の心はよく男の心とまるであべこべの方に走つて行く事があつた。それでも二人はにらみ合いもしないで会えばじょうだんも云い、下らない事で笑つたりして居た。女は自分の心の底の底までさらけ出して男に見せたくなかった。自分の思つて居る事、考えて居る事を、男が味のない話でうちこわし

にかかると女はいつでもフツと口をつぐんで、すき通る結晶体の様な様子をしてたかぶつた目色をして男を見て居た。時には自分の予期して居る返事とまるであべこべの事を云われた時の辛い心を味いたくなさに「何々と云つてちようだい」と口まねをしてもらう事さえあつた。男は彼の女をよく我ままな人だと云つて白い眼をする事もあつた。けれどもどうした訳か二人は仲が悪くならなかつた。女の一寸したそぶりが男の氣にかかつて、一晩中ねもしないで翌朝青いかおをして男が来た時も、女はすき通る様なうすいまぶたを合わせてね入つて居たり、男が女の氣むずかしいかおを氣にするのを見向きもしないで、柱に体をぶつつけてふてる様な様子をしたり——はたの人から見ればきつとこの次会つた時には、お互に知らんかおをして居るに違いないと思うだろうと思われる事をしながら二人の間に日が立ち月が流れて行つた。女は心中しかねないほど自然を愛して居る。美しい葉の輝き、草の香り——そうしたものを見るとたましいのぬけた様にボーツとして居る事が多かつた。限らない嬉しさに思わず土にひざまずいた時等にうっかり居合わせる男は氣が氣でないと言ふ様に女の様子を見つめてだまつてその耳たぶのうす赤くすき通るのを見て居るのがあけくのはてには女の心をかたまらさせてしまつて居た。美しくさ、快さの中に吸いこまれて居ると「何をぼんやりしてる？」なんかつて声を男がかけた時女は「いやな人だったらあ

りやあしない、もう絶交さ……」こんな事を小声で云つて男を息づまらせたりして居た。

彼の女は恋をするなら人間ばなれのした、命がけの燃えさかつて居るほのおの様な、お互に相手の名と姿と声と心と——そうしたもののほか心の中にかつて居ないほどの恋がして見たかった。けれども女はいろいろに出る心をもつて居た。片っ方のまっかな光が恋をしようとするれば、すぐその裏に光つて居るまっさおな光がせせら笑いをしてちやかしてしまふのが常だった。心の光が全体同じ色に光つて呉れる時は、どこに行つても手を開いて抱き込んで呉れる自然に対した時ばかりであつた。

赤い光が「彼の人を恋人にしてやろうか」とつぶやくと青い光は「フフフフ」と笑つて笑いも消える時には「恋人にしてやろうか」と云う光は消えてしまつて居た。

「恋をするんならお七の様な恋をする。それでなけりやあ齒ぬかりのする御□みたいな恋はしたくない……」彼の女はよくこんな事をその男に云う事があつた。

春がすぎて夏になった。囲りにはまるで若武者の様な力づよさとなつかしさがみなぎり始めた。彼の女はもう男の事なんかすっかり忘れぬいた様になって、このまんま死んで行きやしまいかと思われる様な草の香りや、自分の姿を消してしまいやしまいかと思われる青空の色やに気をうばわれて居た。其の男はぬけ出した彼の女の魂の又もどつて来て自分

を思い出して呉れるまではどうしてもしかたがない——とあきらめた様に女の様子を上目で見守つて居た。男は彼の女があんまり思い切つた様子をするのが見て居られなくなつて旅に出かけた。その時も女は一寸ふり返つたつきり又ふり返つて「行つてらっしゃい」とも云わなかつた。それでも男は旅に出た。彼の女は「恋人にすてられた人が苦しさを忘れ様と旅に出る様な様子をして居た事」と思つたつきりであつた。夏の末、秋の初め——いろいろに美しくなる自然は段々彼の女に早足にせまつて来た。女の目はキラキラとかがやいて唇の色はいつでももえる様にまっかになつて居た。何でも自然の作つたものを見る彼の女の様子は初恋の女がその恋人を見る様に水々しくうれしそうでさわる時には、苦しいほどのよろこびとに体をふるわせて居た。彼の女はあけても暮れても自然の美しくさに笑い歌い又泣きもして居た。男の事は頭の中になかつた。女は沢山歌を書き文を書き只自分が自然と云うものの中に自然に一番したい芸術と云うものの中に生きて居るのを感じて居るばかりだつた。

秋の中頃旅を終えて男が歸つて来た。その日も彼の女は青白く光る小石に優しいつぶやきをなげながら男には只「お帰んなさい、面白かつたでしょう」と云つたばかりであつた。そして原稿紙の一つばいちらばつて居る卓子に頬杖をつきながら小声にふとからからと湧

いて来る歌を口ずさんで居た。男はそのわきに少し目の落ちた彼の女の青白い横がおを見つめて立って居た。男はどもる様にこんな事を云った。

「どうしてそんなひやつこい様子をして居るの、何か腹の立つ事があるの」

「腹の立つ事なんか一つもありやしない、うれしくってうれしくってしようがないんだから……」

彼の女は斯う云って又歌のつづきを云って居た。

「何がそんなにうれしいんだか話して御らんなさい」

「聞いてどうするの？……私には、貴方よりももっとすきな、そしてもっと好い恋人があるから……」

彼の女は平気で髪一本ゆるがせないで云った。目は小石を見て居た。それでも男の顔の色が一寸変ったのを彼の女は知って居た。化石した様にだまって突立って居た男は、押し出される様に「じょうだんは云いつこなし……」男はどうぞこれより私を驚かせる事は云わないでネと云う様な目をして彼の女を見つめながら云った。

「ほんと、……何故そんなにびっくりするの？」

「ほんと？　ほんと？　一体……どんな人なんだろう」

「どんな人でもない……自然……エエ、自然、マア、どんなに私を可愛がって呉れるんだか……」

彼の女はかるくほほ笑んだまんま云った。男のかおには少し安心したらしい色が見えた。それでもまだかたくなっておどろいた様子をして、彼の女の萩のナヨナヨとした若芽で結んで居る髪を見つめた。

「私の居ない間に自然が貴方をとつちやつた……」

男はこんな事を云った。彼の女の口元はキュツとしまった。そして、

「私はあるたのもんじやあ始つからありません」

裁判官の様に重くひやつこく女の声は云った。

「御免なさい」

男は小さなふるえた声で云つて原稿を机の上から取つて読んで居た。女はさっきの事をもう忘れた様に歌を云つて居る。

沢山の歌の中に、男は彼の女の気持を見つけ出した。そして木々の葉ずれ、虫の声、そんなものに霊をうばわれて小さいため息を吐き、歌をよみ、涙をこぼして居る彼の女をソーツと見て、もうこの人のきつと死ぬまで自然を恋して居る人に違いない……と思った。

それから二人は、歌をよみ合ったり、限りなく広い世の中を話し合ったり、会った時にはきつと真面目な考え深い時を送った。夜二時三時まで頬を赤くして亢奮した目つきで話し合つてその時男の云つた事が合点が行なくなつて一週間もつづけざまに一つ事を話し合つた事もあつた。彼の女の自然を愛する心は日毎に深くなつて行つた。男からはますます解らない謎のかたまりになつて来た。けれ共云う事はお互によく分り合つて居た。

「貴方は段々私に考えさせる様になつて来る」

男はあぐれ机に向い自然とびつたりあつて嬉しさにおどつて居るまだ若い彼の女を見て居た。彼の女の心のオパールはより以上に複雑にこまつかくするどい光をはなして居る。

或る人の一日

何とはなし、どうしてもぬけないけだるさに植物園にスケッチに行くはずのをフイにして、食事がすむとすぐ相変らずのちらかつた二階に上つて、天井向いてゴロンとひつくる返つた。ぞんざいな造りの天井をしさいに見て居ると、随分といろんなものがくつついて居る。それを検微鏡で見たらさぞ面白からう、まのぬけた顔をしてこんな事を思った。ま

だ買つて来て半年もたない浅草提灯のひだのかん定を始めたが、どうしても中途まで来ると数が狂つてしまう。幾度くり返してもくり返しても同じなんで「人馬鹿にしてる」こんな事を浅草提灯に云つてムツクリと起上つた。机の前に座つたがどうも気が落つかない。こないだ注文してやつた筆立の形も思う通りに出来るかと思つて不安心だし、下絵の出来て居る絵の色の工夫も気にかかる。「第一うちに女竹がないからいけないんだ。黒猫ばかりもらつたつて何にもなりやしない」一人ごとを云つて壁紙に女竹と黒猫を書いた下絵を見つめる。どうしてもあの三本目の竹の曲り工合が氣に入らない。思いきつて破いちまおうかと思わないでもないが、一週間つぶしたと思うと流石未練さすががのこる。「マアいいさ、なる様にはなるにきまつてる」いくじのない理屈をつけてヒョツと目にふれた三重吉の『女と赤い鳥』をとる、夢二の絵の中によく若い娘が壺を抱いて居るのがあつたが、あれはこのパンドールの壺なんだキツト、こう思つて長い間のなぞもとけた様な氣がした。

「赤い鳥」をよんで居るうちにフツと自分がまだ十七八の時の事が思われた。

「彼の時分は若かつた」斯う思うとほんとうに心がゾーツと寒くなる様な氣がする。こないだあの人 came 時にそう云つて居たのがやつぱりあたつてゐる、と思われる。小さい時からきりようよしだと云われて居た自分の目の大きい顔の白い、髪のマツくろでしなやかで

形よく巻けて居た様子が、博多の帯をころがした時よりも早く悲しげな音をたてて頭の中にくりのべられた。朝起きぬけから日の落ちるまで絵具箱を肩にひっかけていろんなものをうれしくばかり見て暮して居たその時代が、とびつきたいほどなつかしく思われた。

「あの時代は私一人の封じた壺をまだあけなかった時だった」小さい声で云ってきかせるようにさとす様にささやいた。「十八の時——十八の時」こうした言葉が悲しい調子を作つて体中をとびまわつて居る。ジイツと耳をかたむけると心臓の鼓動までそんな調子にうつつて居る様な気がしはじめる。

「何んだいくじなし、パンドールの壺にはまだ一つ幸にのこつて居るものがあるじゃあないか」

斯う云うと自分で自分を馬鹿にしたような高笑をした。そうしてその笑い声がパツと消えてしまうと前にもました淋しさがまわりからヒシヒシとまるで潮のよせる様によせて来て自分のこの小つぽけな体をひつさあらつていつてしまひそうにする。「何んだい、何んだい」にがいがおをしながら机にすっかりよつかかった。けれどもともすればこの形のないうちよいいものは、再びうき上られない深いところへ巻いてきそうにする。ジツとして居られない様になつてこれまでに一番自分の氣に入つた絵の絹地の下にかばつてもらう様に

座った。はれやかな舞子の友禪の袂の下にはあんな力づよいものもよせて来られないと見えて気は段々かるく力が出て来た。衰れなみなし子がその救主を見上げる様なオロオロしたはずかしそうな目つきをして、若々しいまるい顔にこぼれる様なほほ笑みをうかべてウツトリと見入って居る舞子の姿を見上げた。とろける様なうれしい気持になって一人手に、こわばった様になった口元がほどけてまるで若い娘がする様にうなだれて畳の目を見ながら肩を小さくふるわしてクスクス云って居た。その様子をヒョツと想像するとたまらないほどおかしくなって、今度はわだかまりのないカラツとあけっぱなしの気持で笑った。

「妙な奴だ」と思いながら、二階のユサユサするほど足に力を入れて歩き出した。下でつかさんが「何だネエ、だだっこ見たいに、ねだがぬけちやうワ」こんな事をいつて居るのを小耳にはさんでクスリと肩を一ゆすりしてきりぬきのゴツチャゴツチャになげ込んである襖のない戸棚の前に丸くなって座った。かたそうかとも思うけれ共めんどくさくもあるし、と思つて何か氣に入つたのはあるまいかと思つてしわクチャになるのもかまわずあさったけどどうしても手ばなしたくない様なのが見あたらない、「いやんなつちやあうなア」何ともなしにこんな事を云ってしまった。机のところにまたもどつて、あの人がかもつてきて呉れた狸ばやしと胡蝶の曲を読み始める。この本とひつかえにもつてつた三味線掘

りの手ざわりのいい表装がフイに見たくなつたがマアマアとあきらめる。こんな退屈などうにもこうにもしようのない様な日に、あの人が来ればいいのと思ひ出すともうきりがなくいろんな事が頭にうかんで来て、本の字なんか黒蟻の行列を見る様になつてしまふ。

彼の人の気まぐれにもほんとうにあいそがつきる様だ。こないだは二日つづけて来たかと思うともう三週間位しらんかおをして居るし、ニコニコして居る時と馬鹿にムキムキした時とあるし——それでもマア私の思つてゐる事を大抵分つて呉れるからいいけれども、こないだ着て居た着物の色と頭のうしろつつきがよかつたつけが、今度はどんな風で来るんかしら、妙に着物の変わるのがたのしみなもんだ。

そうそうこないだ来た時に、エエようござんすともなんかつてぞうさなくうけあつて行つた着物はほんとうにもつて来て呉れる気なのかしらん、若しもつて来たら私のあのソフトをかぶせてマントをはおらせて男にばけさせて見ようかしら。でも何だか又理屈をこねそうでもあるけれ共……。それからバックに縫をするから下絵を書いて呉れなんかと云つて居たつけがどんなのがいいんかしら、それはマア、ものが来てからののはなしと……。この次までに綿人形とくくり猿を作つて来て呉れる約束がしてある——

こんなにデコデコに□つて来てヤレヤレよくマア、斯う考えられたもんだと自分でびつ

くりするほどだが、あの人はあんなに飾りつけのない気取らない調子で話をしたり考えた
りして居るが——一体私をどう思つてるのかしらん。そうと空気ん中にとけ込んでさぐつ
て見たい——

すき見をされた様な気がしてせわしくあたりを見まわした。そして一寸自分のかかをとを
小指でひつかいた。そして又続きを考え始める。

デモマア、彼の人が一番私の気持を知つても居、又私の考えに似た事を考えてる様だけ
れ共、私がよつぽど年上で居ながら心のそこをのぞかれて居る様な気がする事があるが——
——キットあの上眼で見つめるのが私の心に妙に感じるのかも知れない。キットでもマア、
えたいの分らない妙な娘さ、何、たかが女だもの、そんなにビクビクする事はあるやあし
ないさ、こんな事をのべつまくなしに考えた。

いつも無難作にかみをつかねて気楽そうな様子をしてながら時々妙にジツと見て居り、
深く深く心にさぐりを入れて居る様にだまつて居て見たりするまだ年の若い娘の事が妙に
気にかかる。「マ、どうでもいいさ、人なみに御飯をたべて居る人間なんだ」こんな事を
云つておう来に見えるまどによつかった。弁当をぶらさげた職人や御役人さまというみ
じめな名にとりこになつて居る人間達が道に落ちてゐるゴミ一本でもためになればのがさず

ひろって行くという様な前つこごみのいやな風をして歩いて行くのが見える。つくづく自分ののんきさがうれしく思われる。

親父にはどんな事があつてもなりつこなしにするのさ——どじょうつびげを気にしながら小供のお守をして居る親父殿を見るとすぐ斯う思われた。何かすぐ筆の下せる様な人が通ればいいがナアと根氣よくまつて居たが、来るどころか皆いやな様子のもものぼっかりが通る。何とはなしにかんしゃくが起る。かんしゃくが起ると自分の体をあつい鉄の板の上になげつけてやりたい様になるつて云つてたつけが、一つここからとんでやろうかナ、立ち上つてフト——窓からは飛ばずに階子をかけ降りて三味線をつかんで又かけ上つた。

調子なんかかまわずにただ一寸はじいてもいい音がする。そのつながりのない一つ一つの音にも何となく思いをはらんで居る様なので撥のはじで一本一本丁寧にいろんな音を出してはじいて見る。

その音の中から何か湧き出して来そうな気がする。撥をすてて爪弾をして居ると、何となくその音がこないだ見た紙治の科白の様にきこえる。どうしてあの時はあんな風に酔わされたのかしら、涙が出て——涙が出て恥かしいほどだったが、涙のこぼれる方がまだ好いんだ。三味線をほっぼり出して壁によっかかつてあの時のうれしかった事を思い出す。

あのなよなよとした肩つつき、頬かむりの下からのぞいた鬚の濃さ、物思わしげな声——それだけ思っても頬が熱くなつて来る。

あの通りの着物を作つてしつとりと着て見たらさぞうれしいだろうが——あの時はまるで自分が紙治になつて居た、傍で見て居たら、キット一緒に首を動かしたりうなだれたりして居たんだろう。も一遍あんな氣持になつて見たいナ、若い娘がいい人の事を思い出した時みたいにトキントキンとどうきが高くなつて眼がかすむ様になつて居る。「いいなあ」我知らずこんな事を口走つてしまった。下でおつかさんが「お昼だよ」つて云つてるけども行きたくなんかありやあしない、ちつとも。こんないい氣持でこんなおだやかな心でこのまんま死んじまいたい様だ。

何を考えるともなく目をつぶつてうつとりとして居た。何にもする事もなし、浜町にでも行つて焼絵を書いてでも来ようか、と思ひ立つたんでスケッチブックをつつこんでフラリと飛び出すとおつかさんが何かしきりに云つてなさる。何かしらと思つてあともどりをして見ると、臺口を忘れたんだつた。「のんきな奴だ！」と云つてしまった。しばらく歩いて見たが電車にがたがたゆすぶられるのもと思つてお師匠さんのところへ行つてしまった。

「マア、随分この頃はお見限りでしたネ、貴方のこったからって云ってたんですけれ共」いきなりこんな事をあびせかけられた。稽古台はからっぽで縁側に三つ四つ友禪の帯が見えて居る。一番はじつこに居る娘のえり足が大変にきれいだ。お師匠さんにうたわしてひかして自分はだまつて遠くから見て居ると、自分が手をもって教えてもらった人の様には思えない。一寸絵になりそうな様子の女だとこないだっから思ってる。

金のいやにデコデコした指環のある手で器用にひきこなして居るのを見ると、若い時の事がフツと思われる。新橋の何とかと云う妓^コだったってきいた事があるが、今の年でこの位なら若い時にはキットさわがれて居たんだろうと思う。四人の娘達がかくれてばかり居ていくらよんでも出て来ないいでいやな氣持になったからプイと出て浅草の仲店に行つて見る氣になつて電車にのる。沢山のつて来る女の中でマアと思う様なのは一人もいやしない。芸者らしくない芸者を見たりみつともなく氣取つた女を見たりするとつくづく素足で何とも云われないほど粋な様子をして居た江戸時代の柳橋の芸者がなつかしくなる。仲店を幾度も幾度も行つたり来たりして三四枚スケッチと玩具の達磨と鳩ぽっぽとをふり分に袂に入れて向島の百花園に行つて見る。割合にスケッチも出来なくなつてイラついて来たんで電車にのつて山下まで行つた。あのうすっくらいジメジメしたところに帰るんだと思う

とたまらなくなつてしまつたんで又九段の友達の家に行く。二人でやたらにシンミリと紙治の話をしこんでしまった。あれもほんとうによかつたネ、私だつてないたサ、あの着物そつくり着て見たいと思つてるんだ。私は紙治のまぼろしと心中してしちまいそうだなんで云つてたほどだから……たまらなくうれしかった。ここにも私の味方がある、こう思われた。そんな事でよい家に帰りたくなくてとめてもらうよと思いきつて云つてしまった。いいともさ、私だつて帰したくなかつたんだもの、とあれも云つて居た。二人で手をにぎりあつて十二時の時計をききながらもねようとししないで、「二十三だネ、もうお互に……」こんな事を云つて、今朝なつた様な恐ろしさに又おそわれてジツとあれによりかかつて居た。「でも若いよ、まだ……」あれはこう云つて丁度大病人に医者はまだ心臓がはつきりしていらいしゃいますからつて云うような調子で云つて私の髪を指の間でチャリチャリと云わせて居た。

嬉しくつてかなしい——夜は更けて行く。

〔無題〕

私達……私達ばかりじゃあなくたいの人が、本の表紙などは一寸見てもうはなされないほどすきになるものや又もう二度と見たくない様な心持のする本もあると云うことを云う。そんなこと思うほうがほんとうか……おもわない方がほんとうか？

インクの色もその人の年によつてすきな都合が違ふと云うことをこの頃になつて知つた。ようやくインクをつかいはじめた年頃から私達より一寸大きいころまではつきりとしたブリューなんかがすきで、二十ぐらいになるともうじみな、書いたあとの黒くなる様なインクがすきになる。

その色のすききらいのぐあいはその年頃によつてこの気持によるものらしいと私は思う。私達は姿のとのわないものをすべて十五六と云つて居る

十五六の時の娘達や男の子のとのわない中ぶらりんの姿をたとえたものである。

私は妙な子で自分の十五六なのを忘れて、十五六、十五六と云つて居る。

十五六つて云う時ばかりよけいにとしたようなきもちで見下すように「十五六ですもの、貴方」と云つて居る。

いそがしい時なんか一日二日病氣になつて見たいと思う事がある、人間にありがちな

気まぐれなものずきな心持で……

この頃よく小さい大人を見ることが有る。何だか若い命を短くされたんじやあないかと人ごとながら可哀そうに思われる。

四十近くなる女の厚化粧と、庇がみのしんの出たのと齒の間にあかのたまって居るのはだれでもいやだと云う。

なんでもつり合わないのは一寸妙なものに思われるに違いない。

ゴチゴチにすみのくずのかたまつた筆を見ると人間のミイラを見る時とそんなに違わないほど見せつけられる様なきがする。

スイミツ桃のうす青な水たつぷりの実は、やわらかくてしない赤坊のように思われるが、天津桃の赤黒いデブデブした紫のつゆのたれそうなのは、二十五六のせつぷくのゲラゲラ笑うフトツチヨのはのきたない女に似て居る。

○この頃の本の沢山出来る事と云つたらほんとうにマア何と云う事なんだろう。古い雑誌に出版物の統計が出て居たけれども、日本がいちばんたくさんである。そのくせ、そんなにありながら英訳し伊訳して立派な恥かしくないと思われるのは民間の金貨のようだと思われる。

第二日

鶏は女房孝行な内にもどつかつんとしたところがあるけれど、鴨はどこまでもいくじなしで鼻つたらしに見える。

鶏はいつも牝鳥をかばってやって、人がいたずらをするときみの毛をさかだてておっかけるが鴨は置いてきぼりにして夢中になって自分からにげ出してしまふ。

梨の果はその育ち工合はなかなか貴とげなきつと人にたつとばれる実になりそうに思われる。ようやく白いあまい形をした花が散って子房がふとり出すと、もう一寸でもさわるとすぐ思いきりよくポロリと落ちてしまふ。小さい、見えるか見えないかの小虫がついて

もすぐ落ちてしまう。朝と夕方の清らかな露のうるおいとふるいにかけた様な空気とで育って行く様子はピリリツとした権しきのあるかしこい頭をもった女のようにだと思われ。

東京に沢山ある町のその一条毎にその特有のにおいが有る。それも気をつけてかぐ様にしてあるくのが私はすきでわり合に沢山の町の香いを知って居る。

小石川の宮下町の近所は古い錦の布の虫ばんだ様な香がする。

銀座の竹葉のわきの通りは、だいだいのような香がする。そして混血児を見るような感じがする。

根津の神社のわきの坂は、青つくさいのようなモルヒネのような香がする。

巢鴨ステーションの近所はもちのこげたような香がする。そいであすこいらの小家がみんなかびたもちで目に見えない大きなさいばしがそれをあみの上にのせてあつちやつたりこつちにやつたりして居るように思われる。

根津のところから西片町にぬける奥井さんの細い通り露路はおばあさんのあたまのあぶらの様な香がする。

林町の裏町の家の間のせまいつきあたりの様な町があるところは、おせんこくさい様な香がする。それは、そこは小家が沢山ならんで居て大抵そこにおばあさんが多くすんで居る。それを知って居るんでおせんこくさい香がするように感じるのかも知れない。

もとよりこんなことは人それぞれの感じでちがって居るから、あたって居るかどうだかわからないけれども。

人が町によつて色があると云うけれども私にははつきりこれがわからないけれども。

浅草が豚の油でといった紅のような気のするのと、

染井の墓地に行くまでの通りの、孔雀石をといてぬつた青のような気がするのと、

京橋のわきの岸が刺青のような色をして居るようなことだけは感じて居る。

フランネルで作った犬の腰のぬけて、めだまのぬけたのは妙に可愛いもんで、首人形の髪の手がらの紅の少しあせたのと、奇麗なかおの少し黄がかったようなのはなつかしい古い錦をなでて居るような心持になる。

新らしい本のかどかをなでまわすのと、新らしい雑誌の紙をきるのとはたまらなく、新らしい着物のしつけをとるよりうれしい。

この頃子供達、内ばかりの……の間に、「得意にやっちよる」と云うことばが流行^{はや}つて居る。

兄弟が何かずにとつてやつて居るとはたで、

「得意にやっちよる！」

とはやしたてると、云われた子はまっかなかおしてやめる。

世の中にも、

「得意にやっちよるー」

とはやされそうな人は沢山居るにちがいない。

第三日

ダンテの像に黄色いきれで頬かぶりをさせたのと、百姓おやじに同じことをしたのと同

じ位似合うのには一寸びつくりした。

可愛がらなければならないはずのものが可愛くなくって、可愛がらなくってもいいものが可愛くてたまらないと云うことは、だれにでもある人情だと見える。

黒毛の猫とあんまりやせた犬とはねらわれて居るようで、かべのくずれたのはいもりを、毛深い人は雲助を思い、まのぬけて大きい人を見ると東山の馬鹿むこを、そぐわないければしいなりの人を見ると浅草の活動のかんばんを思い出す。

用いふるした金ペンと小さい鉛筆をためるのと、髪の毛の数を想像し、草の生えて居るところを四角に切つて元禄にとつて行くのは馬鹿げたことでたのしみなことである。

ひまつつぶしにはくもとにらめっこをするのがいい、いつまでたつてもあきることがない。人形になる、天狗になる、蛇になる、天馬になる、スヒンクスになる、宮殿になる、様々に変つてやがて馬鹿にしたようにプツととんでつてしまうから。

第四日

人間が無念無想になる時は、一日の中に可成沢山有る。私の一日中に無念無想になる時には、

朝起きてかおを洗う時……手拭に水をためて顔にあてた切那、

あくびをする時、あついお湯にしずむ時、だるくってそ□□□けんになった時、ハツ
と思つた時、

こんな時になる。

又、一番下らない事をしみじみ考えるときは、

ひぎを抱いて柱によっかかった時、

団扇の模様を見て居る時、

人のものをたべるのをはたで見えて居る時、

障子の棧を算えて居ると妙に気が落つく、又蠅の糸の様な足を二本合せておがんだり、

三本合わせておがんだりして居るのを見るといやに面白い中にせわしないイライラな気持ちになる。

人のおが可愛いなんかって云うのは、赤坊のおを標準にして居ると或る人が云ったけれ共、なんだか若し大人が赤坊のお通りならずいぶんまのぬけたものだろうと思われる。

のんきは——一寸のんきさがますと馬鹿に近くなってしまう。

人にはどんな人にも多少惨こくな心持が有るにちがいない。たとえばここに下らない人の書いた地獄の絵と、名人のかいた山水とならんとすると、山水は一すいいかげん見て置いて地獄の針の山に追い上げられる亡者や、火の池をおよぎそこねるものなんぞを「ずいぶんいやな絵ですネー」と云いながら前よりも長い間そこに立ちどまって見る。

私が何かものずきに雅号をつける。

それが雑誌なんかで同じ名が見えると、自分の領分に足をふんごまれたような馬鹿にされたような気持になるので、そのたんびにとりかえる。くせの一つかもしれない。

第五日

小供なんかつて云うものは妙なもので、頭が単純なせい、一つはなしを幾度きいてもあきないで笑ったりなんかしてよろこんで居る。

かおがそんなに奇麗でなくつても、声のきれいなのはそれよりもまして可愛い心持のするもので、みにくいかおの女がなめらかな京言葉をつかつて居るのは、ずいぶんと似合わしくないもので、きれいなかおの人が椋鳥式のズーズーでやって居られるとなさけない、いきなりポカリと喰わされた様な気がするもんだ。

京の女は砂糖づけかあめのように、東の女達はさんしよの様なすつきりとしたピンとしたところが有る、とは昔からきまつた相場であるけれ共、この頃は江戸っ子と椋鳥とごっ

ちやになつて九州のはての人と北海道の人とごつちやになつてしまったので東京にすんで居る人でも、随分ごつちまぜになつて居る。毎日乗る電車の内にも見てほんとうの江戸っ子を見ることは一寸ない。往復の電車に一人も見えない時などには随分と心細く、キリリシャンとした角帯がなつかしい気になるが、京橋辺で思いがけない江戸っ子の女になんかあうとめつぼう心太くなつてしまう。

私はもう十五にもなつて居て……昔なら御手玉もつて御嫁に行つた年なのに、まだ大人の着物を引きずつて着るのと戸棚の中に入つて下を見下して居るのが妙にすきで、鉛筆の先のまあるいのが大きらいでいそがしい時鉛筆がふとくなると涙がこぼれそうになる。イライラするとじきに涙が出そうになるかわりに、ふだんはそんなになき虫じやあない。

「女は泣かなくちやならないもので、男は働かなくちやあならないものだ」と何かに云つて有つたけれ共、この頃は女もないて許りいちやあたまらないようになつて来た。「涙もろい……一寸したことになく女と、中々かないいじつぱりの女とどっちが御すき？」と男の人にきくとやつぱりけんかしてもいじつぱりの人の方がいい、と云う。

思いきり自惚うぬぼれて居て、ひよつとあてのはずれた時の人ほどみじめなものはないと思う。自慢なんかする人は天からのんきでなくつちやあ出来まいと思われる。なぜつてば自慢つて云うものは「御自分さまつて云う御方は御えらい御方だ、御姿はよし御声ならよし、学問なら、遊芸なら何でもござれで……さてさてマア」と自分で足駄はいて首ったけになつて居るのが即ち自惚れである。そんな人がひよつと人から自分のわるい評判をきいたり、笑われたのをきいたりしようものなら、にが虫を百足かみつぶしながら蜂にさされて泥をぶつけられたようなかおして悲観してしまう。自惚のつよい人ほど悲かんの程度が強い人だろうと私は思う。

斯う云うものの自ぼれて居られる人はたしかに幸福な人だと思う。何故ならば多少の自信をもつて居ても自ぼれなければいつでもイライラする気持になるから。

ひろい海の前に立つて自分も大きな人間になつた様な氣のする人と、いかにも自分の小さいものに思われる人とある。

始めのように思う人は多少自信のある人のなる心持で、あとの方はまだ自分の心のはつ

きりわからない、不安心な人になる心持である。

私は後者に属して居る。

人間の作つた字と云うものを長く見て居ると、こんなまがりくねった線を集めたんで、どうして意味が有るのかと妙に思われると一緒に作つた人間と云うものが不思議に思われる様になってしまう。

体の妙に細い角々しい曲線の手先もうでも太さの同じな、かおのほね立った動く時に埃^エジプト及模様の中の人間のようになる人がある。

埃及模様なセセシヨン全盛のこの頃、そんな人も全盛かと思うとそうでもないから妙なものだ。

妙なもんで兵児帯のはばをうんとひろくまきつけて居る人は田舎ものの相場師か金貨の様に見えてしかたがない、とはどう云うわけだか自分にも分らない。

同じ形をした同じ枝の葉でも□でも、その一角でも赤か黄にそまって居ると人は目に

つける。それが死ぬ間ぎわの色でも……人間も木の葉とそんなに変わらなく一寸色が変わって居ると目立つものだ。

田舎に育った娘は、しずかなチラツト白眼をつかつてかんだぐるようなことが多く、都に育った娘は、人なつこい中にならず幾分かのかぎった、いつわったところが多いと思われる。

仕事をしなくてはいけない、仕事をしない人間は生き甲斐のない人間だと云うこの言葉だけは知って居るけれ共、何故仕事をしなければならないか？ と云う問題になるとはつきり分らないものだ。

この頃は天才がふえた。ことに雑誌なんかの上で大人が一二度小才のきいた文章が出しであるとする「前途多望の天才」とかなんとか云う尊称がたてまつられる。そんな人にかぎってその投書の一年とつづいた事がなく、その次からの文がきつと前よりも劣って居る。「天才のねうちが下ったナア」と思われる。

何故昔は男でも色のはでな模様のある着物を一般の人が着て居たのに、この頃は男の着物と云えば黒っぽいもののようにきまつてしまつたんだらうか？　どんな深いわけが有るんだらうかと思われる。

私は何だかもうずっとたつたら男のと女のすれ違う時が来るんじゃないかと思われる。何と云うわけなしにただ……

髪の毛のこわい人は人間もこわいとある人が云つて居る事である。

けれども私はこの間、私の知つて居る人でかみの毛はごくこわいが、気のやさしい涙もろい人を見つけた。その日から、そのことばがうそのように思われて来た。うそと知れて居てもきもちのいい事もあるし、たしかにほんとうの事でも不快な事もある……

一寸した事にふれて起つた気分をどうにもこうにもしようがなくなつてそのまんまだんだらうすれて行くのをまつてるのは随分となさけないもののように思われる。

田舎の女にはよく二つ名前の有る人がある。家の二人の女中とも、キク、とよんで居る女は一名キイ、

セキ、とよぶのはマサと云う。

雷神さんでどうかこうとかしたんだそうだが何だか妙なもんだ。

活字でおしたまま、線の思いがけなくまがって居るのや、

字のあべこべにつまって居たりなんかするのは、氣まぐれなほほ笑まれるような氣になる事だ。

雄鳥にわとりの、雨が降ると今までピント中世紀の武士の頭かざりのような尾をダラリとたれてしまう。

まるでおちぶれたおくげさんか、急に丸腰になった武士のような氣がする。

文章なんかをよくまねる人がある。私も覚えがある。自分で作る時よりもどれだけ努力し、それだけ力をつくすにはけっして「まねてはいけない」とすげなく云いきるのは、

きのどくな位である。私はそう思う、「同じまねるんなら前のよりもよくまねてほしい」と。だれでも思い、だれでも云うことだけれども私はつくづくそう思う。

どんなに着かざった人を見ても、きれいに御化粧して居る人を見ても「人間だ！」と思うとなぜだか興がさめる。

よくものを買うと景品がついて来る事がある。私は人間の世の中には買物でなくっても景品と云うものはある、と思う。

気まぐれでフツと思い立った時に、急にものの事のしたくなるのは我ままの一つだけども思いながらうちやりぱなしにして置いてしたものよりはたしかに結果がいいし興味もある。そうなると一部分の我ままはかまわないものじゃあないかとも思われる。

何をするでも魚の魚ら□□になつてはならない。

私は本をつんで机の前に坐つて、原稿紙のかおを見ると年だとか女だとか云う事から遠ざかつてしまう。テーブルに向つて箸をとると、年と女だつて云う事がはつきりと心に浮ぶ。どう云う心理状態だかわからない。

鴨の夫婦が俵に足をつけたような形をして、ヨチヨチとあるいて食物がありながらおせわしそうにあさつて居る様子を人間が見て滑稽だと云う。けれども人間は鴨よりもなお悪がしこい知恵もあり、きたない心もある。そして一つの小っぱけな光るものを得ようためにあざむかずとすむものをだましたり、めかくしをするように人の心をすかし見たりして居るのを人間より一段上のものが居て見たらば人間が鴨を見て笑うよりも倍も笑われるに違いないと思う。

女つて云うものは妙なもんだと自分で思う。

生活でも何でも男よりは複雑で男の倍も細くくだいて一つ事をして居る。

男よりこまかい事に気をくばつて居ながら、それで居てかんじんの一目見てわかるような大きなところに気がつかないから……

女は男の謎の一つだと昔からきまつて居たそうだ。それは女は自分のいやな時は遠慮したり辞退したり笑いにまぎらしたりしてしまつてよいに思つてゐる事がわからない、化物のようだからと人が云つた。けどこの頃は女が馬鹿になつて男が前よりも利口になつたんだか何だかしろないけれども、女つて云うものが段々あきらかになつて来る。いやな事はいや、いい事はいい、そんな事をはつきり男がわかるように云つたりしたりするのはいいだろうけれども時によると心のそのそのどんぞこまでさらけ出してしまふ女があるとはこの頃の男の人がよく云う、即ち妻の相場が下つたわけだろうけれども一方学問、女子の学問は段々進んで来て居ると云う事は、女の利口になつたしるしだとして見ると、一寸そこがホコトンして居るように思われる。

ヤソ教なんかエスが即ち神だと云う人と、ヤソつてものが人間からかけはなれて居る神と云うものを紹介した人だと云う人もある。

ある人は昔、今よりも人間が無智と云う尊い名にとらわれて居た時には、エス様は天上なすつて神に御なりなされたと云えば、ウンと合点したもんだけれども、この頃は人が一

体に善いにも悪いにも智恵が出て来たんで、疑と云う一つのものを頭のすみっこに置いて、何物にもぶつかって行く。だからエス様が天上なすって神さまに御なりなすったと云うと疑が「一寸変だナ」とつぶやく。それが段々ひろがってそんな事は信じなくなってしまう。だから、神を紹介した人だとしてはなすのだ、と云う。又或る人はその偉大な霊が神になったんだと云うんだとも云ってきかせてくれる。

まだいろんな事の万分の一も知らない私なんかは、そう云われると段々迷うばかりになつてしまう。その時代にでもどんな時代にでも、いろんな風に云いかえたり言葉をかぎったりしないでも人に信じられるだけのものと高い位置があつてほしいと思われる。

人間の一生は、千年あるわけのものじゃあないからと云う言葉は、人間にとてつもない偉い事もさせるし又そこぬけの悪党にもして仕舞う。

青空文庫情報

底本：「宮本百合子全集 第二十八巻」新日本出版社

1981（昭和56）年11月25日初版発行

1986（昭和61）年3月20日第6刷発行

※底本では会話文の多くが1字下げで組まれています、注記は省略しました。

入力：柴田卓治

校正：土屋隆

2009年8月9日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

芽生

宮本百合子

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>